

セザンヌと「サン・ ヴィクトワール山」

松 葉 良

セザンヌが晩年に描いた「サン・ヴィクトワール山」の連作は彼の代表的傑作といえるのではないだろうか。その中の一点が日本のブリッジストン美術館にも飾られている。この絵画を十年程前から眺めた時の強烈な感動は忘れることの出来ないものである。私自身この原画に接する以前、セザンヌの絵画を真に理解することは出来なかった。

ピサロやシスレー、モネ等の印象派の画家達に対しては早くからその絵画に親しみを感じ、共感するものが大きかったのだが、セザンヌだけはその初期の作品のどっつき悪さと不器用ともいえる画面の固さのみが一つの先入感を作りあげてしまった

のである。

しかしこの「サン・ヴィクトワール山」の原画による感動の要因は何であつたらうか。

詩人リルケがセザンヌの絵画に対して「此所にこれがある」と言っているが、ものがそこにあるということは絵画における永遠の可能性の探求という問題をはらんでいるといえよう。セザンヌが求めていたものは常に変化してゆく自然の中で絶対に変化しない存在を画面に定着させようとしたのである。

セザンヌが印象派のピサロによって色彩分割を教えられたことは一つの新しい発展ではあつた。彼にとって印象派の影響は大

きかつたが、彼の心の中にあるフォルムと色彩の問題は印象派の描き方では如何にしても解決しなかつた。

彼は光の波とその瞬間的に消え去つてゆく風景を実在化させるために前人未踏の努力を重ねなければならなかつた。セザンヌは印象主義の画家達が描いた自然は光の中に還元するという方法ではなく、自然は光に対して抵抗するという思考のもとに面という問題にとりくんだのである。彼が物体の輪郭を強調する画面を創造したことはゴッホやゴーギャンと同一だが、その表現された絵面は別のものではない。

ガエタン・ピコンは「セザンヌが持続について語る時、別な次元で語っているのである。持続とは空間における物体の不動性ではなく、それは振動であり転調である。ポプラの木の緑のマッスのたわむれる明るい色班の格子である。セザンヌは眼に見えない、時」の推移を見えるものとする」と言っている。この難解な言葉はセザンヌが常に用いているモチーフということにまでふれなければ理解することは難しい。セザンヌの用いるモチーフ、それは音楽で用いるモチーフと同じであるといえる。即ち自

然の中からモチーフを見出すということ
は、決して自然の中に画題を見つけようと
することではない。

そのことはあるがままに見える自然を分
解し余分のを全てとり除きモチーフを
発見した時にそれを基に創造してゆくこと
を意味する。セザンヌにとってモチーフは
それが如何に發展し変容する要素を持つて
いるか否かに全てはかかっていた。

このモチーフという言葉も彼が若い時代
にワグナーの音楽を非常に好んだというこ
ろに原因があつたのかも知れない。音楽
作品において密度と構成はそのモチーフが
その楽曲の中で如何に有機的に展開するか
にかかっている。その意味においてセザン
ヌのモチーフはベートーヴェンがモチーフ
を決定するために最大の努力を重ねている
のと同様の意味をもっている。

自然の中に何か一つのモチーフを見出だ
しその限られた空間の中で画面の中に定着
させようとする時、その画面は一つの枠を
こえて拡がり始めてゆく。そして自然の持
つ奥行を表現するためにセザンヌが歩んだ
道は気の遠くなるような長い道であつたと
いえるだろう。

セザンヌは自然のみが悠久であるとし、
印象派が確立した色彩に古典主義から受け
つぐことの出来るフォルムを結びつけたの
である。

アンリ・フォションはヴィジョンという
言葉を自然と人間の眼の交流によって生れ
る新しい絵画的な世界像であり、単純な自然
の写実や反映でないことをかなり明確に示
唆している。この考え方はセザンヌの絵画
にそのまま、あてはまるのではないだろう
か。「筆触は構造である」というフォシヨ
ンの言葉は画家自体の手によって創造され
る新しい視覚の世界であることを示してい
る。確かにヴィジョンという言葉の意味が
画家の行為によって創造される一つの新し
い眼の世界であり、その構造型を前提とす
るものである。セザンヌの晩年の絵画にあ
つては空間の構成がヴィジョンとして新し
い想像世界の意味を表現している。

またセザンヌの筆法としての表現には、
極めてリズム的な繰り返しがある。そして
それを方向づけることによって一つのフォ
ルムの確立を量ろうとしている。

「サン・ヴィクトワール山」の色彩につ
いてよく考えて見よう。セザンヌの色彩そ

れは決して華美のものではない。その色彩
は伝統的な明暗法とか遠近法によらないで
描かれているが、画面の絵はだは極めて美
しい。その色彩は他の色彩に働きかけなが
ら画面を形成してゆく。セザンヌにあつて
はものがあつて色彩が見えてくるのではな
くて色彩の相互の関聯の中にもが見えて
くると言ったら良いのであろうか。

セザンヌは過去の巨匠たちの芸術を模倣
するのではなく、モニュメンタルで永続的
なものを創造することを目指したとき、彼
自身のやり方で巨匠達の芸術をやり直すこ
ろに彼の絵画を必死になつて見出だそう
としたのである。セザンヌにとって、完成
された作品などはあり得なかつた。彼は生
きている限り自分の作品に不満を抱き続け
ていた。

セザンヌが見出す構造的な秩序は形だけ
の幾何学ではなしに生命感をともなつて実
現される。それ故知的な認識と感覚的な認
識との間に釣り合いが保たれるということ
も、彼自身の飽くことを知らぬ追求するこ
とのない極限の世界ということが出来るの
ではないだろうか。